

『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』

「天は人の上に人を造らず・・・」の出典について

『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』366頁12行目から371頁の記述は、水澤壽郎氏から「天は人の上に人を造らず・・・」の出典が『東日流外三郡誌』であるという古田武彦説の教示を受けて執筆した内容でした。ところがその後、水澤氏をふくむ4人の読者から『東日流外三郡誌』の偽書説が寄せられ、検討した結果、偽書説を否定しきれないことが判明しました。

2刷（未定）の際に、この5頁足らずの記述は、以上の経過報告と、下記の4点の趣旨をふまえた文章に書き改めることで、高文研の了解を得ています。

以上の件につき、関心のある方は、高文研宛てにご連絡をいただければ、8頁にわたる詳しい経過報告の文書を送らせていただきます。（著者 2007年2月）

① 古田武彦が「天は人の上に人を造らず・・・」の出典が『東日流外三郡誌』であると主張している五つの論拠のうち、第二の「・・・と云へり。」という伝聞態表現、第三のアメリカ独立宣言などに直接「天は・・・」と同文の「原文」が見られないこと、第五の「天は・・・」の「冒頭の一句（天賦人權思想）は、福沢の思想になじまない。」という三つの根拠については、近著に「第二、第三、第五の論拠に積極的に同意できる私・・・」（369ページ）と書いた通り、訂正は不要である。

② 問題は、「天は・・・」の出典が『東日流外三郡誌』であるという古田武彦の主張を前提にして、「なぜ生涯、福沢がその（「天は・・・」の）由来その他を語らなかったのか」という『謎』について、「西欧文明の精神」こそを価値としていた福沢にとって、「明治以前の日本の文明」に帰属する『東日流外三郡誌』が出典であることは自慢・広言の対象にならなかったという解釈を「第六の論拠」に加えて、本書が「天は・・・」の出典について、（従来の）定説的解釈の「私の踏襲を撤回」したことについては、誤りとして撤回したい。

③ ということは、福沢が「天は・・・」の出典に生涯触れなかった理由については、以下のような常識的な解釈に変える（戻す）ことになる。

つまり、福沢が「天は人の上に人を造らず・・・」の出典に言及しなかったのは、『東日流外三郡誌』が出典だったからではなく、『学問のすすめ』初編（全）執筆の時点において、福沢は、アメリカ独立宣言にヒントを得たことと、「天は・・・」の天賦人權思想に同意・同調していないという二つの大事な事実を表現する（読者に伝える）ために、「・・・と云へり。」と正しく『すすめ』冒頭の句を結んでいたからである（釈明の必要性はもともとなかった）。

それに加えて、安川『福沢諭吉と丸山眞男』Ⅱ章、Ⅲ章で詳しく論証したように、『文明論之概略』終章を転機として、（『時事小言』において）「権道」の「人為の国権論」を選択し（未発の課題「一身独立」を、結局、生涯凍結し）、アジア蔑視・侵略の方向へ保守化して以降の福沢は、天賦人權思想に積極的に反対する思想形成を推し進めていったのであるから、福沢にとって、「天は・・・」の出典・由来を語ることは、結局、生涯、自負や自慢の対象とならなかったからである。

④ 『福沢諭吉の戦争論と天皇制論』執筆の時点で、十数年来の『東日流外三郡誌』をめぐる真偽論争の情報の存在に、私がまったく無知であった事実は悔いている。しかし、本書で古田の研究に論及しながら、「天は・・・」の由来に再論及したこと自体については、悔いていない。なぜなら、

最後に書いたように、この問題をめぐる「一番の問題は、…「天は人の上に人を…」の句が『すすめ』全体の精神の圧縮的表現」「福沢イズムの合言葉」という（戦争責任意識の希薄な）福沢美化の「丸山諭吉」神話が継承されてきたことが、本質的で重要な（誤った一加筆）戦後日本社会の歴史意識の問題だからである。」（傍点も加筆）

つまり古田は、偽書『東日流外三郡誌』を依拠史料として利用した点で誤ったとしても、日本の戦後民主主義思想を代表する丸山眞男の「福沢諭吉」神話と（それに追従した数多の福沢研究）の誤りを見事に克服して、「福沢の場合、それはしょせん、「借り物」であり、福沢思想の全体系に「決してなじまない。」という貴重な結論を、（先駆的に）解明・主張したからである。